

デューイ実験学校における教員スタッフの研究 - 「家事」実践におけるカリキュラム編成力を中心にして -

伊 藤 敦 美

Abstract

The purpose of this study is to examine that class plan by Dewey was how to practice by the staff of teachers in his Laboratory School. Dewey's Laboratory School and the staff of teachers are examined based on "Laboratory Schools Work Reports" and "The Elementary School Record". The examination of "House-keeping" practice uses the method of the compares following three records: the class plans by Dewey, the class practices by teachers, the interpretation of the class by Dewey. The data was organized through webbing, and examinations were done.

This study produced the following two results: First, the "House-keeping" practice was being practiced in "Wood-Work", "Foods", and "Clothing" practices, and the specialists of each subjects were guiding it, because the subjects of the History, Science, Work, and Art were covered into "Wood-Work" practice. Second, the organization of the staff of teachers was not fixed, but it had flexibility, and the staff of teachers that has various specialties was guiding children.

キーワード……デューイ実験学校 「家事」実践 「木工」実践 カリキュラム系統図
教員スタッフ

1. はじめに

1-1 研究目的

デューイ実験学校に関する研究は、同校の元教員であるメイヨーとエドワーズ (Katherine Camp Mayhew, Anna Camp Edwards, 1936) や、この研究をもとにしたベイカー (Melvin C. Baker, 1955) などから始まり、我が国でも 1960 年代から大浦猛 (1965) などによって検討が行われるようになったが、カリキュラムや具体的な授業実践の分析は、研究資料上の制限から、未着手であった。近年になって、カッチ (Jerald Alen Katch, 1990) や、タナー (Laurel N. Tanner, 1991; 1997) らが、シカゴ大学の「大学広報 (University Record)」や実験学校の教員による「実験学校ワークリポート (Laboratory Schools Work Reports)」¹⁾などの資料を用いて、デ

ューイの理論と実験学校の授業実践の相違の検討、カリキュラム構成、指導方法の研究などに取り組み始めた。我が国においても、小柳正司が、シカゴ大学の「大学広報」を中心とした一連の研究（小柳,1999a;1999b;2000）に着手したことを契機に、デューイの諸著作をもとにした従来の研究に加えて、これらの資料を用いた同校の研究が行われるようになった。現在、我が国におけるデューイ実験学校に関する研究は、「大学広報」をもとにした同校の分析（小柳,1999a;1999b;2000）、「大学広報」に加えて「実験学校ワークリポート」をもとにしたカリキュラム、指導法、使用された教材の検討（千賀,2001;2002;千賀・高橋,2001a;2001b;2002;2003a;2003b;森,2002;2003）、デューイの諸著作をもとにした理論の分析（高浦,1973;牧野,1977;倉沢,1985;杉浦,1985;2002）そして、デューイ理論を採り入れた授業実践（岩崎,2001）など、さまざまな研究方法で行われている。しかし、未だ十分な分析がなされているとはいえ、解明されていない点も多い。また、これらの新しく発見された資料を用いて同校の教員スタッフに焦点をあてた先行研究もほとんど行われてはいない²⁾。そこで、本研究では、デューイ実験学校における教員スタッフについて「家事」実践を採り上げて検討を行う。デューイが構想した授業計画が、どのような教員スタッフによって、どのように実践化されていたのかを明らかにすることを目的とする。

1-2 研究方法

デューイ実験学校と教員スタッフについては、デューイの諸著作、実験学校の「実験学校ワークリポート」³⁾、「大学広報」などの第1次資料に加えて、同校に関する諸研究者の諸言明をもとにして検討を行う。「家事」実践の検討は、デューイによる授業計画である「大学附属初等学校の組織案」(Dewey,1895)、デューイ実験学校の教員による授業実践の「実践記録」(1898-1899) デューイによる授業実践の解釈である『学校と社会』(Dewey,1900)⁴⁾を用いて、これらを「計画」、「授業実践」、「解釈」の一連の授業実践としてとらえ、それぞれについて分析を行い、対照する研究方法を用いる。「計画」、「授業実践」、「解釈」の分析や検討には、筆者が開発したカリキュラム系統図を作成する方法⁵⁾を用いて研究を行う。この「家事」実践の検討を受けて、デューイ実験学校の教員スタッフについて検討を行う。この検討には、「実践記録」に加えて、『エレメンタリー・スクール・レコード』(Dewey,Lunyon,1900)⁶⁾を用いる。

1-3 論文構成

本論文は、5章から構成されている。第1章では、研究目的、研究方法、論文の構成を示す。第2章では、デューイ実験学校と教員スタッフについて述べ、第3章では、「家事」実践の検討を行う。第4章では、第3章の「家事」実践の検討を受けて、1898 - 1899年度の「家事」の授業実践における教員スタッフについて検討する。第5章は研究のまとめである。

2. デューイ実験学校と教員スタッフ

2-1 デューイ実験学校の設立

デューイは、自らの実験学校について、「この学校は2つの面を持っているが、それらはおちろん、互いに表裏の関係にある。その1つは子どもたちに対するものであり、他の1つは、教育学研究に従事する当大学の学生たちに対するものである」(Dewey,1896a,p.244;大浦編,1977,p.149)と述べている。そこで、本節では、実験学校の設立意図について、子どもたちに対する視点、教育学研究に従事する学生たちに対する視点という2つの観点から検討する。

まず、子どもたちに対する観点から検討を行う。デューイは、自らの実験学校の教育について「今日わたしたちの教育に到来しつつある変化は、重力の中心の移動にほかならない。それは、コペルニクスによって天体の中心が、地球から太陽に移されたときのそれに匹敵するほどの変革であり革命である。このたびは子どもが太陽となり、その周囲を教育のさまざまな装置が回転することになる。子どもが中心となり、その周りに教育についての装置が組織されることになるのである」(Dewey,1900,p.22;市村訳,1998,p.96)と説明する。「旧教育(old education)⁷⁾は、重力の中心が子どもの外部にある」(Dewey,1900,p.22;市村訳,1998,p.93)とデューイは考えたので、重力の中心を子どもにするべく、実験学校における教育実践が組織されたのである。

デューイは、「伝統的な学校の教室には、子どもが作業することができるような場はほとんどない。子どもが構成したり、創造したり、そして能動的に探究したりすることができるような作業場、実験室、またそのための材料や道具、さらにそのようなことに不可欠な空間さえもが、たいていの学校で欠如している」(Dewey,1900,p.23;市村訳,1998,p.93)と批判する。また、旧教育で使用される教室については、「『ものを聴くため』だけにつくられたものである。……(中略・引用者)……そこにあるのは一定の出来合いの教材であって、それは教育長や、教育委員会や、教師によって、あらかじめ準備されていたものであり、子どもはそのような教材から、できるかぎり短時間で、できるだけ多量の知識を取り込めばよいということを意味している」。「できるだけ多数の子どもたちが扱えるように、つまり、子どもたちを個々の単位から成る集合体として、全体として取り扱えるようにと、すべてのことが整えられているということである」と述べて、旧教育においては子どもが受動的に扱われていることを批判し、「子どもたちは活動する瞬間に、みずからを個性化する」として、子どもの活動を重視することの必要性を強調する(Dewey,1900,pp.21-22;市村訳,1998,pp.92-94)。さらに、「教育に関わるいっさいの事柄が『聴く』という基礎に立っているとすれば」、「いとも簡単に、教材と教育の方法を画一化することができる」(Dewey,1900,p.22;市村訳,1998,p.94)と指摘して、旧教育の方法やカリキュラムの画一性を批判する。

このような状況を改善するための教育学上の実験施設として、1896年1月にシカゴ大学附属初等学校として設立されたのが、デューイ実験学校であった。理想的な学校について、「両親が

賢明で、子どものために最善なものがなんであるかを見分けることができ、また子どもが必要とするものを供給することができる能力をもつ」ような「理想的な家庭」を「組織化し一般化してみるならば、そこには理想的な学校をもつことになるであろう」（Dewey,1900,pp.23-24;市村訳,1998,p.97）とデューイは述べる。子どもたちを受動的な状態にとどめ、画一的な教育方法やカリキュラムを適用する旧教育に対して、デューイは「理想的な家庭」のような学校を構想し、実践化しようとしたのである。

「理想的な家庭」そのままではなく、それを「組織化し一般化」した学校が必要であるとデューイが考えたのは、「子どもたちが、家庭の仕事や人間関係から獲得しうるものは、付随的なもの」（Dewey,1900,p.24;市村訳,1998,p.98）であるにすぎないからである。学校は、「子どもの成長を促進するもの」について、「それに必要とされるすべての手段」を「集中して取りあげられる」場所なのである（Dewey,1900,p.24;市村訳,1998,p.98）。つまり、学校においては、自由に何かをして、偶然何かを得られるというような活動ではなく、成長を促進するような活動が組織されて採り入れられる必要があるとデューイは考えていたのである。また、「子どもにとっては、生活することが第1であって、学習は生活することをとおしてこそ、また、生活することとの関連においておこなわれる」（Dewey,1900,p.24;市村訳,1998,p.98）ので、学校に採り入れられる活動は生活することと密接に関わるものであることが重視された。

次に、教育学研究に従事する学生たちに対する視点から、デューイ実験学校の設立意図を検討する。デューイがいうところの教育学研究に従事する学生たちとは、「当教育学科は、すでにかんがりの『教育に関する実際』経験を持ち、自分たちの『担当』学科に関する学問的諸原理やごく最近の教育動向を、さらに突っ込んで研究したいと望んでいる教師たちを受け入れている。教育長とか師範学校教員とかの前歴を持つ人々が、それゆえに当教育学専攻の大学院生の大部分を占めているのである」（Dewey,1896a,p.244;大浦編,1977,p.149）と説明されていることから、ほぼ、教育学の研究者であるとみなせる。したがって、教育学研究に従事する学生たちに対する視点とは、教育学研究の専門家に対する視点であると考えられる。教育学研究の専門家に対する視点は、教育学上の実験の視点とも言い換えられるので、この教育学上の実験の観点から同校の設立意図を検討する。

デューイは同校開校以前に、シカゴ大学の学長であったハーパー（William Rainey Harper）にあてた意見書「The Need for a Laboratory School」において「理論的な指導と結びつけて、公開授業、観察、実験を行なうことのできる学校の経営は、この計画全体の中枢である。これなくしては、如何なる教育科学も、教育界の信頼をかちえてこれを掌握・指導することなどはできようはずもなく、また、諸原理を提示するだけで、これらを実際に公開・吟味する手だてを欠いたのでは、教育専門家の注意を引き付けるまでにはならないであろう。さらに、これなくしては、理論的な研究そのものも道化とペテンの性質を帯びることになる」（大浦編,1977,p.147）と述べて、理論的な実践と結びつけて、公開授業、観察、実験を行うことのできる学校、すな

わち、理論を実践化できる学校の必要性を説いている。

この意図で設置されたのがデューイ実験学校である。同校の果たす役割について、デューイは、「この小学校は、理論的研究を実際教育の諸要求と接触を保ちながら進めていく中心的役割を果たし、また、さらに手を加えていけば他の学校にも安全かつ強力に推奨できるような教育方法を、吟味し発展させていくための実験ステーションともなっている」(Dewey,1896a,p.244;大浦編,1977,p.149)と説明する。ただ、同校の目的について「この学校の根底にある考え方は、実験室の考え方である」(Dewey,1896b,p.417;大浦編,1977,p.154)と述べて、同校の実験室の性質を積極的に肯定する。だが、「小学校の組織に直接適用できるような教育方法を考案することにあるのではない」(Dewey,1896b,p.417;大浦編,1977,p.154)とその役割について一定の注意をうながしている。すなわち、「もし、公立学校が現在よりも学級の規模を小さくし、教員数を増やして、新しい作業仮説(working hypothesis)⁸⁾を立てることが賢明だとすれば、そのことを立証するだけの何らかの機関があつて然るべきである。このようなことを当校はやってみたいと願っている。したがって、非実用的であることを目指しているわけではないが、同時に当校は公立学校に直ちに移し換えることのできるような性格のものとなることをめざしているわけではない」(Dewey,1896b,p.418;大浦編,1977,pp.154-155 参照)というのがデューイの意図するところであり、この方針にしたがって、デューイ実験学校はその実験室の性質を教育実践において果たすこととなったのである。次節では、どのような教員組織によってこの実験学校の運営が行われていたのかについて検討する。

2-2 デューイ実験学校の教員組織

1896年1月のデューイ実験学校開校時の教員は2人であった。1人はクララ・ミッチェル(Miss.Clara Mitchel)という女性で、彼女は、フランシス・パーカー(Francis Wayland Parker)が校長を務めるクック師範学校(Cook County Normal School)の卒業生で、同校の教員をしていた。後に、教育学科の大学院学生のスメドレイ(Mr.F.W.Semedley)が手工作業(manual training work)の指導のために加わるという体制であった(Dewey,1897,p.325;小柳,p.187)。つまり、この2人がすべてを担当するというオールラウンド教員の方針がとられていた。

しかし、1896年10月にこの方針は変更されることとなった。メイヨーらによれば、「当初はオールラウンド教員が最もよいと当然思われていた、そして、おそらく1人の教員がいくつかに枝分かれする子どもたちを教えるのが賢明であるだろうと思われていた」。だが、「好みと訓練によるスペシャリスト 異なるラインに沿ったエキスパート である教員を保証することがよいとされるようになった」(Mayhew,Edwards,1936,p.35)ので、オールラウンド教員の方針は放棄され、これ以降、スペシャリスト教員の方針が採用されることになった。デューイが目指していた、最新の科学の成果や科学的なものの見方を習得させること、高度な技術を身につけさせることは、その分野の専門家でなければ困難であることに気付いた結果であろう。Table 1

は『エレメンタリー・スクール・レコード（The Elementary School Record）』の各号に記載されている1900年の実験学校の教員名と専門分野、実験学校での担当一覧から筆者が作成したものである。この表から、デューイとヤング（Ella F.Young）の大学助言者（University Adviser）の2人に加えて、さまざまな分野を専門とする常勤の教員27名、アシスタント27名（シカゴ大学の学生で一日に1-2時間担当する）が実験学校の教育実践を行っていた⁹⁾ことがわかる。この時期の実験学校には実に多様な専門分野の教員がおり、専門化された授業が行われていたことが想像できる。ただ、1900年の2月から12月まで月に一冊ずつ発行された『エレメンタリー・スクール・レコード』の教員の紹介欄に若干の変更が確認できること、そして、メイヨーらが、1900年から1902年までの間に子どもの数が最も多くなり、この時期の教員数は23名、大学院生のアシスタントは10名に増加した（Mayhew,Edwards,1936,pp.7-8）と述べていることから、この表に記載されている全員が全ての教育実践に関わっていたのではなく、若干の流動性を持った教員組織であったようである。デューイは、「組織化された教授の形態は、次第に専門領域別になってきた。これは、作業が主要な諸分野を明確に示す必要が出てきたからである」と述べ、そのために「私たちはいま、科学・歴史・家事的または家政的技芸・狭義の手工（木工と金工）・音楽・美術（すなわち、図画・水彩画・粘土細工など）そして体育といった区分を認めている」（Dewey,1899,p.65）として、実験学校の教員組織が専門領域別に変化してきたことを説明する。また、千賀・高橋が、「この学科組織とは別に、特別グループ教師（Special Group Teacher）が各グループの子どもに責任を負っていた。グループ担任である特別グループ教師の役割は、子どもの出席をつけること、教室の割り当てと管理、父母の相談のために週1度の空き時間を持つこと、父母に身体観察の結果を報告すること、少なくとも週に1度は担当教員との話し合いを行うこと」（千賀・高橋,2003b,p.66）と報告していることから、学科組織からはなれて、それ以外の仕事を担当する教員もいたことが分かる。

また、実験学校の授業時間は、午前9時から午後12時まで、午後1時から2時半までであり、8歳以下の子どもは午前中の授業のみであった。月曜日、水曜日、金曜日は教員と子どもの活動に直接に関わることをしない限りにおいて訪問者を受け入れていた（Dewey,Lunyon,1900,p.1; 千賀・高橋,2003b,p.66）。次節では、1898-1899年度の教員スタッフについてさらに詳しく検討する。

2-3 1898-1899年度の教員スタッフ

この年度の実験学校について、松村将（1994）は、「98年10月の新校舎への移転が転換点となって、充実期に入ったと見てよい。というのも、ただ校舎の移転といった外的条件の変化だけにとどまらず、この機会をとらえて、大学との関係をより緊密にするために部門形式（departmental form）が採用され、下級初等部（sub-primary department）を新設して、4-5歳の幼児

Table 1 実験学校の教員と担当分野(1900)

名前	専門分野
大学助言者 (University Advisers)	
John Dewey	哲学博士(Ph.D.)、シカゴ大学教育学部長、校長(Director)
Ella F.Young	哲学博士(Ph.D.)、シカゴ大学教育学部助教授、指導主事
教員 (Staff of Teachers)	
Georgia F.Bacon	理学士(B.S.)、ミシガン大学、指導主事、歴史の学科長
Katherine B.Camp	理学士(B.S.)、ミシガン大学、カリキュラム主事、科学の学科長
Laura L.Runyon	哲学士(Ph.B.)、シカゴ大学、英語の代行学科長、学生(指導)部長、記録者
Allthea Harmer	Pratt and Drexel 学院、家庭科および産業の学科長
Lillian Cushman	ニューヨーク芸術協会、シカゴ芸術学院、美術活動の学科長
May Root Kern	音楽の学科長
Clark Peterson	ボストン師範学校体育科、体育の学科長
Marion Schibsby	文学士(B.A.)、Vassar、ラテン語、ドイツ語
Katherine Andrews Healy	理学士(B.S.)、スミス大学、科学教諭
Mary Hill	文学士(B.A.)
Mary Tough	Pratt 学院、家庭科教諭
Fannie Dayton Brown	芸術学院、デザイン教諭
Elizabeth Jones	手工訓練(2.3.4.5.6.7.8.9)
Monsieur Maxime Ingres	文学士(B.A.)、パリ大学、フランス語教諭(3.4.5.6.7.8.9)
Frank H.Ball	ケンブリッジ手工訓練学校、手工訓練の学科長(1.2.3.4.5)
Minerva Butlim	音声訓練(2.3.4.5)
S.B.Sinclair	修士(M.A.)、トロント大学、数学の代行学科長(6.7.8.9)
Florence La Victoire	初等活動科長(最初の4年間)(6.7.8.9)
Charlotte Teller	文学士(B.A.)、シカゴ大学、ドイツ語および英語教諭(6.7.8.9)
Harry O.Gillett	科学教諭(6.7.8.9)
Louise Delpit	パリ大学、フランス語(1.2)
M.Laver	アシスタント、美術活動(8.9)
Ellen Boll	Armour 学院、手工訓練(8.9)
Georgia Scates	シカゴ無償幼稚園協会、Armour 学院、幼稚園の長(1.2.3.4.5)
Grace Dolling	シカゴ無償幼稚園協会、幼稚園教諭(6.7.8.9)
Kate Neal	シカゴ無償幼稚園協会、幼稚園アシスタント(8.9)
Martha Pattee	シカゴ無償幼稚園協会、幼稚園アシスタント(8.9)
アシスタント(Assistants)	
Margaret Hoblitt	文学士(B.A.)、スミス大学、歴史(1.2.3.4.5.6.7.8.9)
Wynne Lackersteen	構成的活動(Constructive Work)、読み方(1.2.3.4.5.6.7.8.9)
Alice Readford	哲学士(Ph.B.)、印刷(1.2.3.4.5.8.9)
Grace Dolling	幼稚園(シカゴ無償幼稚園協会)(1.2.3.4.5)
Edith Sexton	美術活動(1.2.3.4.5)
Anne Moore	シカゴ大学、数学(1.2.3.4.5)
Ellen Bolli	Armour 学院、彫刻(1.2.3.4.5)
Gertrude House	音楽(1.2.3.4.5)
Bertha Barnett	記録(1.2.3.4.5)
Jessie Irvin Taylor	幼稚園(シカゴ無償幼稚園協会)(1.2.3)
Arthur T. Jones	シカゴ大学、科学(1)
A.T. Stewart	シカゴ大学、科学(1)
Elizabeth Jones	手工訓練(1)
Mary Dynes Feuling	家庭科(1)
Minerva Butlin	音声訓練(1)
Elizabeth E. Dunlap	音楽(2.3.4.5.6.7.8.9)
Janet S. Marferding	ナンバーワーク(2.3.4.5)
Ellen Baxter	家庭科(2.3.4)
Harry O. Gillett	科学(4.5)
Sylvia Ruger	幼稚園(シカゴ無償幼稚園協会)(4.5)
May Foster	幼稚園(シカゴ無償幼稚園協会)(4.5)
E.Cornelia Bruere	英語(5.6.7.8.9)
Grace Baird	数学(Number)、読み方(6.7.8.9)
Alice Lachmond	家庭科(8.9)
George Garrey	理学士(B.S.)、シカゴ大学、科学(8.9)
Clinton S.Osborn	文学士、ミシガン大学、数学(8.9)
Charles E.Marks	科学、生物(8.9)

* カッコ内の数は『The Elementary School Record』の号数。数がない場合は全ての号に記載。

(『The Elementary School Record』,1900,No.1~9 及び千賀・高橋,2003b,p.65 を参考に筆者作成)

を収容するといった学校組織そのものにも変化が加えられているからである」(p.32)と述べている。小柳(2000)、森久佳(2002)も教員組織の部門制¹⁰⁾と幼児部門の新設をこの年度の特徴として説明している。

デューイ実験学校は開校当初、オールラウンド教員によって異年齢混成の集団を指導する形式が採られていたことは前節で述べた通りである。デューイが、『学校と社会』において「幼い子どもの教育と成熟していく青年の教育とを分離している障壁を打破したいのである。そして初等の教育と高等の教育とを一体のものにしたいと願う。教育には初等も高等もなく、ただあるものは、教育だけであるということが、見た目にも明らかに提示することができるであろう」(Dewey,1900,p.55;市村訳,1998,p.154)と述べたことや、「大学附属小学校の3年間」において「当校開校当初において、私たちは、年齢や学力の異なる子どもたちをできるかぎり混在させ、一緒に学ばせるようにした」(Dewey,1899,p.64;市村訳,1998,p.254)と述べたことの実践化であったと考えられる。だが、実験学校の運営にあたって、この試みは開校から半年間で変更され、1898年から部門制が正式に実験学校の教員の組織原則となった。この原因として、小柳(2000)は、「子どもの欲求や興味から出発して、しかも各分野にわたって確実な学習を組織するとすると、教師は特定分野のスペシャリストでなければならない。・・・(中略・引用者)・・・一人の教師があればこれも教えるということになると、結果的に、子どもたちに質の高い学習を提供できなくなる」(p.122)とまとめている。デューイが目指していた、学校に最新の科学の諸原理を採り入れることや、真に学ぶ価値のある教育内容をとりあげるためには、教員は専門家である必要があったのである。

こうして、教員の部門制が正式採用された一方で、幼児部門の新設が行われた。異年齢混成集団ではなく、おおよその年齢や共通の器量(capacities)、精神的態度、興味の共通性によるグループ編成が採り入れられた実験学校で、幼児部門が新設されたことは、教育の連続性を強く意識した「幼い子どもの教育と成熟していく青年の教育とを一体のものにしたい」というデューイの方針による。

ここまで、1898-1899年度のデューイ実験学校における教員組織の大まかな枠組みについて述べたが、次に、この年度の教員スタッフについて検討する。

前節で、『エレメンタリー・スクール・レコード』の記述をもとにして筆者が作成した実験学校教員と担当分野の表を示した。この『エレメンタリー・スクール・レコード』は、「デューイとローラ・ラニアン(Laura L. Runyan)の編集により、1900年2月から12月にかけてシカゴ大学出版から9分冊で逐次刊行された実験学校の実践記録である」(小柳,2000,p.116)。この記録が刊行された背景として、小柳(2000)は、「実験学校は、開設からほぼ3年が経過した1899年には、それまでのさまざまな試行をふまえて、実践的にほぼ安定した形をとるようになった。デューイの有名な『学校と社会』のもとになった三連続講演が行われたのも、この年の4月である。The Elementary School Recordは、1898-1899年度の終了を期に、実験学校の研究成果を

一般の学校の教師が利用できるようにすることを意図して刊行された」(p.116)とまとめている。先に、1898 - 1899年度は、デューイ実験学校の組織が整い、学習指導要領が2年間の施行期間(1896 - 1898年度)を経て完成に近づいたとされる時期であったことを述べたが、この『エレメンタリー・スクール・レコード』もこの完成に近づいたとされる学習指導要領に従って行われた教育実践をもとにして書かれている。したがって、『エレメンタリー・スクール・レコード』の記述をもとにして作成した Table 1 に示されているのは、1898 - 1899年度の実験学校の教員であるとみなせる。また、実験学校の教員による1898 - 1899年度の「実践記録」においては、授業で実践された内容が、グループごとにテーマに分けられて、実践を行った教員によって既述されているので、これらをもとにして、この年度の教員スタッフについて検討する。

Table 1 に記載されている教員スタッフ全員が全ての教育実践に関わっていたのではなく、若干の流動性を持った教員組織であったと推測されることは、前節で指摘したが、「実践記録」によっても、このことは確認できる。例えば、グループの「科学」(Science)は、1898年10月3 - 4日、10月21日、10月28日は、アンドリュース(Katherine Andrews Healy)が担当しているが、11月4日、11月11日はヒル(Mary Hill)が担当している。その後、12月は、アンドリュース、1月はヒルというように担当者が代わっている。また、ヒルは「ハンド・ワーク」(Hand-work)や「歴史」(History)も担当している。グループにおいても、アンドリュースとヒルが科学を担当しており、グループでは、アンドリュースとチャンプ(Katherine B. Camp)が科学を担当している。これは、教員組織が流動的であったことと同時に、各教員がそれぞれの専門性を活かして、諸領域をカバーして子どもたちの指導にあたっていたことも示している。また、Table 1には、大学助言者としてデューイとヤング(Ella F. Young)の2名の存在が確認できる。「実践記録」では、「デューイ博士による示唆」(Suggestion, Dr. Dewey)として、グループのナンバーワークについて「定規の学習をする最も良い方法は、数の考えを実際と関連付けることである」といった助言が確認できる。教員による授業実践の報告を受けて、大学助言者がこのような示唆をし、デューイ実験学校のカリキュラムの修正や変更が行われていた。次に、「家事」実践について検討し、この授業実践を実験学校において実際に行っていた教員スタッフについて検討する。

3. 「家事」実践の検討

3-1 デューイによる授業計画の検討

デューイは「大学附属初等学校の組織案」において、「調理(cooking)、木工(carpentry)、裁縫(sewing)の3つの典型的な諸活動(広義の)は、構成的な仕事にとって心理学的な側面で十分な機会をもたらすものとして採り上げられる、一方、社会的には人類の基本的な諸活動を表すものである」(Dewey, 1895, pp.230-231)と述べている。そして、目指す学校について「こ

の学校が真の共同体生活を表すこと」、「子どもの器量、好み、ニーズを適切に表現する諸活動という視点で個々の子どもについて研究すること」(Dewey,1895,p.232)に注意をうながしたいと述べ、「家事 (House-keeping)」、「木工 (Wood-Work)」、「食 (Foods)」、「衣 (Clothing)」についての授業計画をまとめている。典型的な活動を「調理・木工・裁縫」の3つと述べているにもかかわらず、授業計画は4つの内容で構成されている。この授業計画について杉浦は、「かなり粗い素描」とことわった上で、デューイが「総合学習としての授業」を如何なるものとして捉えていたのかについての手懸りを掴むことが出来るのではないかと(杉浦,1985,p.304)として紹介しているが、この先行研究では「衣」、「食」、「住」の3つの授業計画として報告されており、「家事」の部分は紹介されていない。人間の典型的な諸活動を「調理・木工・裁縫」の3つであると指摘していながら、授業計画は、「家事」を含む4つの内容から構成されていたのはデューイのこういった意図からなのであろうか。

Figure1 デューイによる授業計画〔家事〕
(Dewey,1895より筆者<伊藤>が作成)

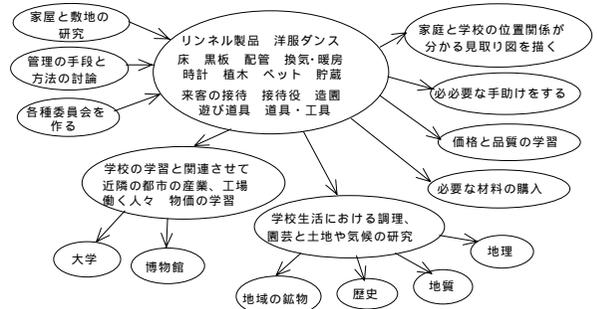


Figure1 にデューイによる授業計画である「大学附属初等学校の組織案」をもとにして作成した「家事」の授業計画のカリキュラム系統図を示す。この図から、家庭生活に関する仕事を通して、「学校の近隣や都市」、「産業や工場」、「土地や気候」など、学校の外の社会へと学習が展開するように計画されていることがわかる。さらに、「一定の間隔で交替する各種委員会」の存在に注目すべきである。家庭生活と同様に、それぞれの仕事の担当者を決め、主体的に活動が行われるように計画されて採り入れられたと考えられる。これらの特徴は、この計画が「学校が真の共同体生活を表す」ことを意図したものであることを明確に示している。

Figure2 デューイによる授業計画〔衣〕
(Dewey,1895より筆者<伊藤>が作成)

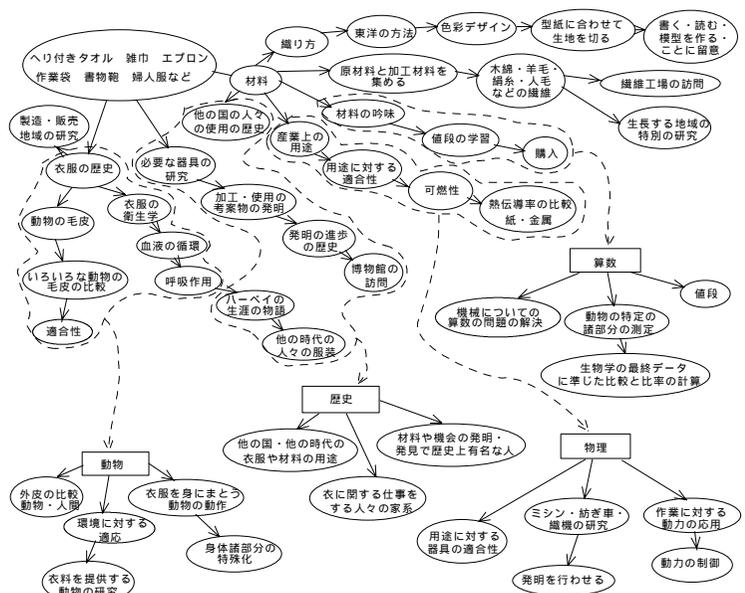
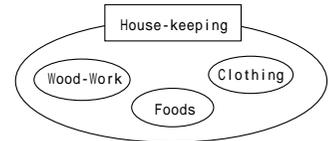


Figure2 に「衣」の授業計画のカリ

キュラム系統図を示す。Figure1と比較すると、計画が詳細で、「衣」の学習から「算数」、「物理」、「歴史」、「動物」といった専門諸領域へと学習が導かれるように計画されていることがわかる。「食」、「木工」の計画も同様の傾向を示している(伊藤,2002;2003b)。「家事」では既述のように「学校が真の共同体生活を表す」ことに主眼が置かれているために、計画にあげられている内容は、家庭の仕事を学校での学習活動に展開するところまでで、その後の展開は他の3つに譲っている。したがって、「家事」は「木工」、「食」、「衣」の3つを包括するものであるととらえられる。人間の典型的な活動として「調理・木工・裁縫」の3つをデューイが採り上げたのはそのためであろう。「家事」が「木工」、「食」、「衣」を包括するものであるという関係を Figure3 に示す。ただ、デューイの授業計画においては「家事」は他の3つと並列で記述されており、この時点で、その性質の違いをデューイが明確に意識していたか否かは現在のところ解明できていない。

Figure3 デューイによる授業計画の構造 (Dewey,1895より筆者<伊藤>が作成)



3-2 授業実践の検討

次に、教員による「実践記録」(Laboratory Schools Work Reports)にしたがって、1898 - 1899年度の「家事」の授業実践について検討する。この年度の授業実践は、幼児部門とおおよその年齢別のグループから編成して実施された。「実践記録」には、授業で実践された内容が、グループごとにテーマに分けられて既述されているのだが、「家事」として報告された内容は、この年度にはほとんど見られない。これは、単に実践に移す際に「家事」の内容が削除されたとは考えられない。それは、前節で述べたように、授業計画の際に考案された「家事」は、「木工・食・衣」を包括するものであるからである。「家事」として直接実践化されたのではなく、「木工・食・衣」の各授業実践の中でデューイが授業計画の際に意図していた「家事」の実践化が行われ、その役割が果たされていたと推測できる。

では、どのように各実践は展開されていたのであろうか。Figure4に「木工」実践について、グループの授業実践のカリキュラム系統図を示す(紙幅の都合で1つにとどめる)。図の点線で囲んだ部分が、授業計画の際の「家事」にほぼあてはまる部分である。この図から明らかのように、「木工」の中で、「家事」として計画されていた内容が実践されている。「衣」、「食」においても、「木工」と同様に「家事」として計画されていた内容が実践化されていた(伊藤,2002;2003b)。したがって、「家事」の内容は実践化にあたって単に削除されたのではないことは明らかである。人間の典型的な諸活動に焦点をあてた授業実践が展開されたことによって、「家事」の「真の共同体生活を表す」という役割は「木工」、「食」、「衣」の各授業実践において担われることとなった。

また、授業計画では、各種委員会の設置が考案されていた。学校の庭の手入れや、飼育動物の世話、その他授業時間内に行いきれないことを委員会活動が担っていたとも考えられるが、1898 - 1899 年度の実践記録においては委員会についての記述は確認できなかった。

3-3 デューイによる実践の解釈の検討

デューイによる「家事」の授業実践の解釈について検討する。前節で述べたとおり、授業実践においては「家事」は独立して授業実践が行われ

てはなかった。直接の授業実践の解釈は行われていない。だが、本章の第1節で述べたように、「家事」が「木工」、「食」、「衣」の典型的な人間の諸活動を包括するものであり、「真の共同体生活を表す」役割を持つものであると考えるならば、次のようなデューイによる解釈があてはまる。

デューイは、「学校制度のいろいろな部分を統一する唯一の方法は、実にその各部分を生活に統合することである」（Dewey,1900,p.86;市村訳,1998,p.134）と述べて、自身の考える学校の象徴的な図解を行っている（Figure5）。そして、この図について次のように説明している。（A）は全体としての学校制度を示している。図中の「1」については、一方に家庭があり、2本の矢印は家庭生活と学校生活との間に、影響力や教材や考え方が自由に相互作用することを示している。「2」については、自然環境との関係が示されている。校舎は自然環境によって取り囲まれている。子どもは、そこから広大なカントリーへと導かれる。「3」は、産業上の諸要求および影響力とのあいだに自由な役割上の相互作用が行われる必要性を示している。「4」は、本来の意味での大学、さまざまな研究の実験施設があり、図書館や博物館の技法によって得られ

Figure 4 授業実践グループ〔木工〕
（Laboratory Schools Work Reports <1898-1899> より著者 <伊藤> 作成）

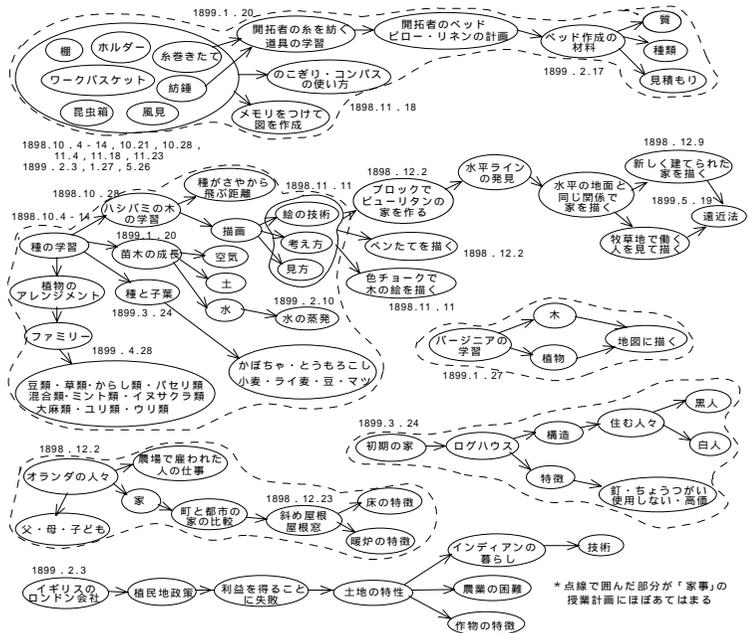
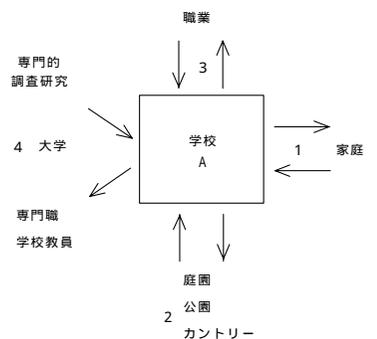


Figure5 デューイによる学校の象徴的図解（Dewey,1899,p.87より引用）



た資料の蓄積があり、専門職業の諸学科が設けられている（Dewey,1900,pp.86-89;市村 訳,1998,p.135）。この図は、1895年のデューイの授業計画において「家事」として挙げられている内容（Figure1）と一致する。学校で学んだことと家庭生活とを結び、日常生活と職業的環境とのあいだの自然な結合関係に気付かせること、学校制度のあらゆる部分に相互作用があることを実感させることが学校に必要であることを示すこの図（Figure5）と、授業計画で示されている「家事」の内容（Figure1）とが一致していることは、デューイが、実験学校での授業実践を通して、授業計画では「家事」として示していたことを、「学校制度のいろいろな部分を統一する唯一の方法が各部分を生活に統合すること」であることを示すための学校の象徴として図式化するほどに考えを整理するに至ったことを示している。つまり、デューイが目指していたのは学校の社会化であり、それを体現する手段の一つが「家事」であったのである。さらに、実際の授業実践にあたっては、「家事」として独立になされるのではなく、人間の典型的な諸活動である「木工」、「食」、「衣」の各授業実践において実践化されていたことも明らかになった。

3-4 「家事」実践の全体の考察

本節では、カリキュラム系統図を用いてデューイ実験学校の「家事」実践を「計画」、「授業実践」、「解釈」という一連の流れとしてとらえ、検討することを試みた。その結果、授業計画における「家事」は「木工・食・衣」の3つの人間の典型的な諸活動を包括するものであったこと、教員による授業実践においては「家事」は独立して行われてはならず、「木工・食・衣」の各領域で実践化されていたこと、1895年の授業計画の際に「家事」として採り上げられていた内容が、1900年の解釈においては「学校の社会化」を説明する図（Figure5）の形で示され、解釈されていたこと、授業計画では各種委員会の設置が計画されていたが、授業実践、解釈では言及されていなかったことが明らかになった。それぞれについて、若干の考察をする。

まず、については、「学校が真の共同体生活を表す」として構想された授業計画であるので、「家事」、「木工」、「食」、「衣」のそれぞれについて、どのような役割を担わせるかといった考えをデューイは持っていたのではなかろうかと推測できる。しかし、「大学附属初等学校の組織案」には、それぞれについての明確な記述はなく、担っている役割が他の3つとは異なっているであろうと考えられる「家事」についても、その詳しい性質の説明はなされていなかった。

については、教員による授業実践において「家事」が独立して扱われていないのは、「木工」、「食」、「衣」の各授業実践の中で扱われたことによると結論付けた。これは、「家事」がこれらの諸要素を包括するものであるが故であると考えられるが、単に、単独で実践化するには困難な内容であったからであるとも考えられる。

については、学校の社会化を表す図が、「家事」で採り上げられた内容と同一であることは、学校の社会化は、「家事」として示された内容が実践化できれば、可能であると解釈することも

できる。授業実践を通して、デューイの理論が整理されたことは明らかであるが、この授業実践において、「家事」に関する内容がどの程度採り扱われていたのか現段階では完全には明らかにできていないので、この理想が実現できていたか否かは現在のところ解明できていない。

また、と関連して、「家事」の内容は、授業時間内に限らず、デューイの授業計画によるように、各種の委員会活動のようなものが担っていた部分があった可能性もある。「学校の社会化」とも関連して、「学校が真の共同体生活を表す」ことを実現するためにもこの各種委員会の存在は重要であるが、現時点では資料の限界から、存在の有無の確認や具体的な活動内容などを解明することは困難である。

4. 1898 - 1899 年度の「家事」の授業実践における教員スタッフ

前章において、「家事」は「木工」、「食」、「衣」を包括するものであるので、直接に「家事」として授業実践が行われてはならず、「木工」、「食」、「衣」の各授業実践において「家事」の実践化が行われていたことを指摘した。そこで、本節では、前章 3 節で採り上げた グループの「木工」の授業実践（Figure 4）を採り上げて教員スタッフについて検討する。

「木工」の授業実践は、歴史（History, United States History, Pioneer Life, Reading）、科学（Science, Botany）、作業（Domestic Science, Manual Training, Hand work, Weaving, Sewing, Shop, Pioneer Work, Textile, Cooking, Number work, Mechanics）、芸術（Art work, Drawing）の、およそ 4 つのテーマで行われており（伊藤, 2003b）、各授業を担当していた教員は、12 名であった。Figure 4 から明らかなように、「木工」の授業実践は、さまざまな専門領域から構成されていたので、それぞれの領域ごとに専門の教員が担当していた。1 人の教員は 1 つの領域のみを担当するのではなく、自分の専門に関連するいくつかの領域を担当することが行われていた。例えば、アンドリュースは、「科学」と「ハンド・ワーク」、ハーマー（Althea Harmer）は、「調理」、「織物」（Textiles, Theoretical study of textiles）、「開拓者の生活」（Pioneer Life）などを担当していた。また、同じ領域を複数の教員が担当することもあった。例えば、「科学」は、アンドリュース、ヒル、チャンプが担当、「歴史」は、ベーコンとランヤンが担当、「調理」は、ハーマーとタフが担当していた。これは、教員の専門性を各授業実践により活かすためであったと考えられる。前節において、「家事」実践は、学校の社会化を体現する手段の 1 つであったこと指摘したが、12 人ものさまざまな分野の専門家によって学習する機会が提供されることは、デューイが目指していた、学校を社会の縮図とすることによる学校の社会化の実践化の 1 つの形であったといえる。

本節では、「家事」実践のうちの 1 つである、1898 - 1899 年度の グループの「木工」の授業実践を採り上げて教員スタッフについて検討したが、「木工」の他のグループ、さらに、「食」や「衣」の実践においても同様の傾向が示されている。次節では、この「家事」実践について、

カリキュラム編成力の観点から検討を行い、本研究のまとめとする。

5. 研究のまとめ

本研究では、デューイ実験学校における教員スタッフについて、「家事」実践を採り上げて検討を行った。その結果、「家事」は、実験学校においては、「木工」、「食」、「衣」として実践化されており、そのうちの1つである「木工」実践においては、歴史、科学、作業、芸術などのさまざまな専門領域が含まれていたことから、それぞれの領域の専門家が指導にあたっていたことが明らかになった。1898-1899年度のグループでは、「木工」の授業実践を担当していた教員は12名であった。教員組織は、完全に固定されたものではなく、流動性を伴っており、さまざまな専門領域をカバーし得る専門性を備えた教員が、その専門性を活かしつつ専門諸領域の指導にあたっていたのである。

このような教員の教授能力の組織化、専門分野の明確化の一方で、デューイは、学校で行う課業の調和の確保も同時に果たそうとしていた。デューイは、「教科専門という考え方の基本に立つかぎり、相関的に、あるいは完全に調和した課業は確保されない、といったことがときどきいわれることであるが、そこにはなんら本質的な障害はないということが、わたしたちの経験により、実証的に示されているということできるのは幸せなことである。子どもの最適な発達のため、共に献身することを通して、また、当校の主要な目標や方法に共に忠実であることを通して、わが校の教師たちは、実業の場合と同じように、教育の場においても最善の組織というもの、労働、興味、訓練といった自然の区分を、正当に考慮することによってこそ、保証されるということを示している」(Dewey,1899,p.65;市村訳,1998,pp.255-256)と述べている。つまり、デューイ実験学校の教員たちが、子どもの最適な発達のために共に献身すること、同校における教育の目標や方法に忠実であることを通して、「労働、興味、訓練」といった自然の区分を考慮することによって、完全に調和した課業の確保が可能になるとデューイは指摘しているのである。

さらに、デューイは、「子どもは、それぞれ別の方向に沿って専門家と接触することによって、学科や知識の面でも利益を得るが、他方、個々の教師は、それぞれ多様な仕方で共通の思想に奉仕し、このようにすることによって、その共通の思想を豊かなものにし、かつさらに力強いものにするのである」(Dewey,1899,p.65;市村訳,1998,p.256.)と述べている。別の方向、多様な仕方で共通の思想に奉仕することによって、その共通の思想は豊かで、力強いものになるとデューイは主張しているとみなせる。したがって、さまざまな分野の専門家が別々の方向から子どもと接触することは、子どもたちを豊かにすることと同時に、教員スタッフの共通性を高めることになる。

デューイは、「理想的な学校」について、「理想的な家庭」を「組織化し一般化」したもの、

つまり、「子どもの成長を促進するものについて、それに必要とされるすべての手段を集中して取りあげられる場所」であると考えていたことを第2章で述べたが、子どもの最適の発達のための献身、共通の思想とはまさにこの「理想的な家庭」に備わっているものであり、この家庭を「組織化し一般化」することとは、専門分野の明確化による教員スタッフの教授能力の組織化によって子どもの成長を最大限に促進しうるように、その手段を集中することに他ならない。このことは、デューイ実験学校におけるカリキュラム編成の際に常に意識されていたと考えられる。

デューイはまた、「本校の経営だけではなく、その教育上の運営も、すなわち、子どもたちを実際に教育するだけではなく、教材の選定も学習過程の立案に至るまで、ほとんどまったくといってよいほど、本校の教師たちの掌中に、つまり先生方の自由に委ねられてきた」（Dewey,1899,p.58;市村訳,1998,p.242）とも述べている。第2章において、大学助言者としてのデューイの発言を紹介したが、デューイ実験学校における授業実践の中心であったのは、教員スタッフであり、デューイはその助言者という立場であったことも重要である。デューイの授業計画を、さまざまな分野の専門家である教員スタッフがその専門性を活かして実践化していたこと、その実践化に伴ってカリキュラムの変更、修正が行われていたこと、実践の後に、さらに教員スタッフによるミーティングが持たれ、実験学校のカリキュラムが編成されていたこと、それらが、新たな教育思想の構築へとデューイを導いたのである。

< 註 >

- 1) この「実験学校ワークリポート (Laboratory Schools Work Reports)」は、現在、シカゴ大学の Regenstein Library Special Collection だけに、1898 - 1899 年度、1899 - 1900 年度、1901 - 1902 年度分のみ所蔵される第1級の一次資料である。
- 2) 千賀 (2001) は、「デューイ実験学校と特別な教育的配慮の実践」について、教師間の連携と個々の子どもへの視点から検討している。
- 3) 「実験学校ワークリポート」は、デューイ実験学校の教員による授業実践の記録であるので、「実践記録」と称する。
- 4) 『学校と社会』は1900年に出版されており、そこで述べられているデューイ実験学校についての内容は、1898 - 1899 年度の活動に基づいていると考えられる。
- 5) カリキュラム系統図とは、ノバックとゴウウィン (Joseph D. Novack and D. Bob Gowin, 1984) が提案する概念地図法にヒントを得て私が開発したものである。筆者は伊藤 (2001) において、学習者は、獲得した知識を自ら構造化し、構造化した知識を使用して問題解決にあたっていることを論証した。この結果から、学習者によってなされた知識の構造化の様子を図に示せるのであれば、子どもの活動の系統に基づいて系統付けられているデューイ実験学校のカリキュラムの構造も図式化できると考えた。構造化された知識は、概念地図という形で図式化できることは、ノバックとゴウウィンが提案しているので、この概念地図を応用して、カリキュラムの構造を系統図に示すための、カリキュラム系統図を開発した。
- 6) 『エレメンタリー・スクール・レコード』(Dewey, J. and L. Runyon, Ed.; 1900) は、デューイとローラ・ラニアン (Laura L. Runyan) の編集により、1900年2月から12月にかけてシカゴ大学出版から9分冊で逐次刊行された実験学校の実践記録である (小柳; 2000, p.116)。
- 7) 引用者による。なお、デューイ実験学校設立時 (1896) の、19世紀の児童や教育の問題については、千賀・高橋 (2001) に詳しい。
- 8) 引用者による。
- 9) 千賀・高橋 (2003b) によれば、幼稚園以外の教師組織は学科別に組織され、とくに最初の4年間は初

等活動 (Primary Work) として担当教員が配置された (p.66)。
10) 教員の部門は、小柳 (1999a) によれば、「歴史」「理科」「家庭科」「手工」「音楽」「芸術」「体操」の7つに加えて幼児部門であった。

< 引用文献 >

- Baker, M.C.;1955, Foundations of John Dewey's Educational Theory, King's Crown Press, Columbia University, New York.
- Dewey, J.;1895, "Plan of Organization of the University Primary School", The Early Works 1882-1898, Vol.5: 1895-1898,1972, 224-243.
- Dewey, J.;1896a, "A Pedagogical Experiment", The Early Works , 1882-1898, Vol.5:1895-1898,1972,244.
- Dewey, J.;1896b, "The University School", University Record, University of Chicago,32, November 6,417.
- Dewey, J.;1899, "Three Years of The University Elementary School", The Middle Works, 1899-1924, vol.1:1899-1901, 1976, 57-66.
- Dewey, J.;1900, "The School and Society", The Middle Works, 1899-1924, Vol.1:1899-1901,1976, 1-109.
- Dewey, J. and L. Runyon, Ed.;1900, The Elementary School Record, Chicago, University of Chicago Press.(9 monographs),1:Art, 2:Music, 3:Textiles, 4:Botany, 5:Kindergarten, 6:Science, 7:Manual Training, 8:History, 9:Curriculum.
- デューイ著,市村尚久訳;1998,『学校と社会・子どもとカリキュラム』,講談社。
- デューイ著,大浦猛編,遠藤昭彦・佐藤三郎訳;1977,『実験学校の理論』,明治図書。
- 伊藤敦美;2001,「認知構造の質と問題解決能力との関連 算数・数学の文章題を取り上げて - 」,現代社会文化研究,22,203-220.
- 伊藤敦美;2002,「『総合的な学習』と知識の活用 - デューイ事件学校の実践から - 」,日本生活科・総合的学習教育学会第11回全国大会発表要旨集,115.
- 伊藤敦美;2003a,「デューイ実験学校における『衣』実践の検討」,日本デューイ学会紀要,44,28-37.
- 伊藤敦美;2003b,「デューイ実験学校における『木工』実践の検討」,現代社会文化研究,27,141-157.
- 岩崎保之;2001,「児童が学習課題をつかむための学習活動の工夫」,日本デューイ学会紀要,42,180-184.
- Katch, J.A.;1990, "Discord at Dewey's School: On the Actual Experiment Compared to the Ideal", Unpublished Ph.D. Dissertation, University of Chicago, 1-246.
- 小柳正司;1999a,「デューイ・スクールの真実」,鹿児島大学教育学部研究紀要,50,185-209.
- 小柳正司;1999b「デューイ実験学校の創設の背景にあったデューイの教育学部構想」,鹿児島大学教育学部紀要,50,211-231.
- 小柳正司;2000「シカゴ大学実験学校の実践記録 1896-1898年」,鹿児島大学教育学部研究紀要,51,115-215.
- 倉沢剛;1985,『米国カリキュラム研究史』,風間書房。
- Laboratory Schools Work Reports;1898-1899, Special Collections, The Joseph Regenstein Library, The University of Chicago.

デューイ実験学校における教員スタッフの研究（伊藤）

牧野宇一郎;1977,『デューイ教育観の研究』,風間書房。

Mayhew, K.C. & Edwards, A. C.;1936, The Dewey School, The Laboratory Schools of the University of Chicago 1896-1903, New York ,Atherton Press.

森久佳;2002,「デューイ・スクール (Dewey School) におけるカリキュラム開発形態に関する一考察 - 初期 (1896~1898年) の活動例を中心として - 」,教育方法学研究,28,23-33.

森久佳;2003,「後期 (1898~1904) におけるデューイ・スクール (Dewey School) の実践の特徴に関する一考察 1898~99年の活動例を中心として 」,日本カリキュラム学会第14回大会発表要旨集録,2003.7,95-96及び発表資料。

Novak, J.D. & Gowin, D.B.;1984, Learning How to Learn, Cambridge University Press.

大浦猛;1965,『実験主義教育思想の成立過程』,刀江書院。

Reports of The University Elementary School; 1897.11.19- 1898.6.10, University Record, University of Chicago. School Record, Notes and Plan; 1896.11.6-1897.6.23,University Record, University of Chicago.

千賀愛;2001,「デューイ実験学校と特別な教育的配慮の実践 教師間の連携と個々の子どもへの視点」,日本デューイ学会紀要,42,108-114.

千賀愛;2002,「実験学校の『読み書き (Reading and Writing)』学習と特別な教育的配慮の実践」,日本デューイ学会紀要,43,128-133.

千賀愛・高橋智;2001a,「デューイ実験学校と多様なニーズをもつ子どもへの特別な教育的配慮の構想・研究序説 (研究ノート)」,学校教育学研究論集,4,99-112.

千賀愛・高橋智;2001b,「19世紀末のシカゴの児童・教育問題とジョン・デューイ」,東京学芸大学紀要,第1部門教育科学,52,219-243.

千賀愛・高橋智;2002,「デューイ実験学校と特別な教育的配慮の実践 算数学習における子どもの困難・ニーズへの対応」,東京学芸大学紀要,第1部門教育科学,53,135-150.

千賀愛・高橋智;2003a,「デューイ実験学校と教育実践の展開」,東京学芸大学紀要,第1部門教育科,54,241-267.

千賀愛・高橋智;2003b,「デューイ実験学校と子どもの発達のニーズに応じるカリキュラム編成論」,東京学芸大学教育学部附属教育実践総合センター紀要,27,55-75.

杉浦美朗;1985,『デューイにおける総合学習の研究』,風間書房。

杉浦美朗;2002,『デューイ教育学の再構築』,八千代出版。

Tanner, L.;1991, "The meaning of curriculum in Dewey's Laboratory School (1896-1904)", Journal of Curriculum Studies, 23,101-117.

Tanner, L.;1997, Dewey's Laboratory School Lessons for Today , New York : Teachers College Press.

高浦勝義;1973,「デューイ実験学校カリキュラムの研究」,日本デューイ学会紀要,14,46-55.

The University Elementary School;1898.10.21-1899.9.15, University Record, University of Chicago.

主指導教員（齋藤 勉教授） 副指導教員（井上正志教授・武井横次教授）